

間引・縁女・水子塚

——松平定信の人口政策とその由來——

大 森 志 郎

一

天明三年（一七八三）の年は、春には雨少く、四月から八九月までは連日陰雨、朝顔などは蔓も伸びずにかじけた。七月には浅間山が焼け、利根川の流れまで變つたといふ噂のなかに、病身であつた白河の藩主松平定邦が、江戸に出て來た。

定邦は養嗣である定信に家督を譲ることにしてゐたが、この凶年に嗣がせるのもと、ためらつてゐると、國家老がわざわざ江戸にやつて來て、藩の人心安堵のためにも是非と、説得したので、相續の手續きをとつた。徳川吉宗を祖父に、田安宗武を父にもつ、松平定信が、小藩白河の政治を擔ふことになつたのは、かぞへ年二十六歳の冬、大凶作のとしの十月のことであつた。

知行の表高十一萬石、當時の實收十六萬四千石であつた白河藩の、この年の損亡は十萬八千六百石を越えた、といふ慘憺たる凶作である。

城下やその近くは收穫皆無の有様で、

白河凶作にして萬頃一毛のたつるなし。皆すだちといふて、いるこなどもなきほどになりたり。にはかにききんよといひたれど、城下にたくはへし米もなし。……みな人束手して死をまつなんと、まことになげかしきさま也。人人此家けふはほろびなんとおもふ也。

とは、定信みづから「宇下人言」に記してゐるところである。

當時にあつては、凶作はそのまま飢餓を意味する。定信が江戸にゐて、いかなる對策を講じたかは、ここには省くが、「仙臺にて餓死したる人四十萬にみてり。津輕も二三十

萬人死せり。その餘右のごとし。予が領國は死せるものなしといへり。されど、餓死せざれども、食物あしくて死せるものはありけんかと思へば、いまでも物くるし。」(宇下人言)といふ追懷は、彼の非常對策の成功を記録する。さうして次のとし天明四年の、豐作の豫想に人人がやうやく愁眉をひらくころ、六月の末に、定信は新しい領主として國もとに赴いた。

定信は江戸で生まれ、江戸で育つた。安永五年、十九歳のとき、養父の代理として白河にいつたことはあるが、將軍の日光社參のための警固が任務であつたから、在藩一ヶ月あまりにすぎなかつたし、藩政については口を容れる地位にもなかつた。それから八年目に、若き藩主としてふたび領國に足をいれる彼は、「みなこそ凶年の手あてありしを喜びて、予が行先、わつかのとゞこふりもなく侍りしぞいみじ。」(宇下人言)といふ歓迎をうけた。

このたびの定信の在國も一年に滿たず、あくる天明五年の六月朔には江戸に歸り着いてゐる。しかしこの短い在國中の成功は、江戸に喧傳せられて、多くの諸侯が彼に治政を聴き、藩政を相談するやうになつた。さうして、彼の出自もものをいつて、天明七年には、かぞへ年三十歳の彼が、幕府の老中の上座の地位につき、それから六年のあひだ、

日本の行政を一手に握ることになつたのである。

文政六年、彼が六十六歳の晩年に、嗣子定永は、藩祖の定封であつた桑名に移封になつた。しかし定信は江戸を離れなかつたし、文政十二年七十二歳で薨するまで、「恩賞にかへて舊領を可願素願」(修行録)をいだきつづけてゐた。白河の藩民が永く彼を徳としたばかりでなく、若き藩主として國に就いたときそこに養家の祖廟を建てた彼もまた、生涯、「白河樂翁」たるを誇としてゐたのである。

二

在國一年に滿たない定信の直接の藩政のなかに、人口政策があつた。宇下人言からは、次の四つを抜き出すことができる。

九十已上のものへ一人扶持をあたふ

子五人もちしものへは米を稱美としてあたふ

村ごとに市女をよびて年に一度づゝ口よせをさせ候事申付る

この國女少なければ越後よりよびよせて百姓にあたふ
このうち、第一の老年者の扶持は、家中、すなはち武士に對する政策であり、人口政策といふ言葉を狹義に解するならば、省いてもよい。第二の子福者の稱美は、この書の

文面では前文について家中だけのやうにも解されるが、藩民一般を對象としたものであつた。

第三のイチメの利用は、みづからその下に割書きして、右によつて、子をかへしたるものなどあれば、其子おのづから出て、はぢたりとぞ。せきわく（關和久―地名）のあたりにては、その子の爲に、にはかにやしろなどたてしとはいふ。

と記してゐるやうに、農民の人工的な産兒調節―間引きへの對策であつた。

イチメはイタコともよばれる、口寄せを業とする市井の巫女である。生まれおちるや否やこの世を去らしめられた嬰兒が、寄せられて言葉を話すといふのは、今日からみれば異なるものであるが、生活體驗に乏しい嬰兒であるだけに、託言も類型的でよかつたはずであり、イチメの託言は、そのごろ民間には、なほ根強い信頼をたもつてゐた。

定信みづからもイチメの口寄せといふものを信じてゐたであらうか。少くともその託言にある程度の信頼性は認められてゐたであらうか。この間には、さうたやすくは答へられない。彼が、年少の頃についた武術の師範の感化をうけて、みづからが一種の超人である、といふ信念をもち、自分の生祠さへたててゐるのを見ると、彼は宗教に縁どほい素質

の人ではなかつた。しかし彼は、政策的なかけひきも用ゐたことがないわけではない。白河在國中に、仙臺の一の宮へ代參をやり、それを毎年の恒例として、神社をとほしてその地方の情報をとることにしたときには、「夢の告といひなし」たし、白河から江戸へかへつた直後の記事には、「あやつりの絲をひきつなをひくごとくなして、しらすしらずによき道へよらしむるなりけり。」（宇下人言）とも書いてゐる。イチメは、おほかた、彼の絲にあやつられる人形であつたであらうと思はれる。

第四の越後から女をよびよせて百姓に嫁せしめたといふのは、江戸時代中期から多くの藩で行はれた人口政策のなかで、おそらくは最も異色あるものといへよう。

人口政策の對象として結婚がとりあげられることが、當時においてめづらしかつたといふばかりではなく、その方策と、方策の根柢をなす理論とにおいて、特異なものをもつてゐたからである。

三

わたくしは、定信時代の白河藩地方の人口對策について、二つの根本資料を提供することができる。

それは、「出生兒養育勘辨の覺」と「越後縁女引取覺」と

いふ二つの文書で、鏡沼村の大庄屋、常松次郎右衛門の手記したものである。美濃判二つ折に合綴し、ところどころに訂正、書入れ、貼り紙などがあつて、原本であることが著しい。

この「覺」の筆者である常松次郎右衛門は、もと八郎右衛門元貫と稱し、隠居して義作といつた。寶曆五年から寛政五年まで(一七五五—一七九三)三十九年間、庄屋、大庄屋、および白河岩瀬石川三郡村々役人目付役を勤め、文化元年(一八〇四)七月、八十一歳で死んだ。家産は明治の經濟變動に没落して、樂翁の來駕を記念してたてた「羽林公觀魚之池」といふ碑柱もほかに移されたが、屋敷は國道に面してをつて、彼の八十の賀に一枚刷まで作つた遺愛の松は、今も國道にさしかかつて聳えてゐる。

わたくしの架藏してゐたこの二つの「覺」の原本は、海外からの引揚げの際、文字を記したもの一切の携行を許されなかつたので、今も存するかどうかを明らかにすることができず、將來回收できるかどうか不明である。

わたくしの架藏に歸するまへ、大正年代に、白河區裁判所の人人によつて謄寫版にされたことがあるが、それを原本と比較してみると、原本の用字法に忠實ではなく、誤讀・誤字もまま見える。この謄寫版すりさへ、今日架藏してゐ

る人があるかどうか。最初にわたくしに示した一人の家にたづねたところ、戦災で失つたとのことであつた。

日本經濟史文献には、この常松次郎右衛門に「天明三年凶作翌年豐作記」といふ記録が傳つてゐるよし記してある。比較してみないので明らかではないが、岩瀬郡史の四二頁から四五頁に抄するものが、あるいはこれであらうか。

以下、この二つの「覺」をたどりながら、定信時代のこの藩の人口政策を考へてゆく。

四

「出生兒養育勘辨の覺」は、大庄屋常松次郎右衛門から、組下の庄屋と組頭とにあてた文書であつて、宛名の下にそれぞれ黒印が捺してあるのは回覽したしるしである。

組下とは、大庄屋として統べる村村のことで、常松は、鏡沼、仁井田、南須釜、北須釜、山新田、高久田、龍崎、三城の目、成田、ほか一村、あはせて十ヶ村を支配し、これを鏡沼組と稱し、鏡沼と仁井田とはみづから庄屋をもかねてをり、これを居掛り兩村と稱してゐる。これらの村村は阿武隈川の左右にのびて、白河の北に散在してゐる。

この文書の日付は、「辰正月六日」とある。文のなかに、「去卯年大變ノ凶作」といひ、「當時大困窮ニ迫リ」といふ

のは、天明三年の關東北の大凶作を指すものに違ひないし、次郎右衛門の隠居は次の丑年（寛政五年）であるから、天明四年正月の文書と推定して誤はない。すなはち松平定信の襲封の三ヶ月目、定信の江戸在府中に回覧したものである。さうして、これは定信の授けた方策ではなくして、この大飢饉に直面して、「御觸モ有^レ之ニ付可^ニ相愼^ニ心掛^ニ之者^モも、貧窮に迫り忘却致候而は歎^ケ敷^ク考へた「組」が、自治的に立案してみづから行つた施策であつた點が注目される。この文書は、先づ、人口の少いのが地方困窮の基であることを述べたのち、

勿論出生之子ニ咎無^レ之處、其親トシテ命ヲ斷申儀、怖敷事ニ候。譬^ハ面々所持之馬出生候節ハ悦ビイワ^キ養育致候事、是は後日之益ヲ考、當前母駄ヲ休メ置、手入之六ヶ敷事モ不^ニ思付^ニ事に候。殊ニハ出生之子無^レ程成長致シ、親ヲ養申事眼前ニ候。此道理能々相辨へ、已來仲眞相樂之義理ヲ以相愼、出生相返シ不^レ申候ハバ、自然ト天理ニモ相叶可^レ申候。

と卑近な例をあげて教誨してゐる。馬の子の生まれたのは祝ふが、自分の子の生まれたのは悦ぶわけにはゆかない、といふやうな不條理な社會がなぜ生じたかは、今は觸れないことにする。出生の子が生長して親を養ふやうになるの

が、「程なく」、「眼前」といへるかどうかもあげつらはないことにする。さうして、末端行政擔當者としての常松の、良識と熱意とを善意にうけとることとしよう。

常松は、「天理ニモ相叶」ふためには、口頭の教訓だけをもつて成果をあげることの不可能なことを、よく知つてゐた。

この「覺」によると、常松の居村の人口は、寛保の初ごろ二百九十人で、このとき天明四年には三百二十人。他郷へ出るを嚴禁し、困窮者を扶助してゐたにもかかはらず、約四十年のあひだに、増すところ三十人にすぎない有様であつた。この人口増加率の異常な停滯が出生率の低調にもとづくものでないことは、いふまでもあるまい。

常松は、居掛りである鏡沼、仁井田の兩村で殺兒の風を匡さうとして、しばしばその罪惡であることをさとし、養育に困難する者へは金三分づつ遣はすこととして、天明元年（天二）以來もたびたび申し渡して養育金を與へた。居掛りでない村村でも、聞き傳へて村役人から申越した者へは同じやうに合力してゐた。しかしこの陋習の根ざすところが深いのと、合力をたのむには遠慮もあつたと見えて、いつか中絶してしまつた。

この「覺」は、餓死年といふ方言さへある地方の、その「大變ノ凶作」の「大困窮」のただなかにおいて、人口の維持を講じようといふのである。ささやかなる寒村の十を一團として、自然の暴威に對して積極的な抵抗を試みたのである。御家流で書かれた數葉の古文書が、悲愴なる人類の意志といつたものを感じさせないでもない。

方策は、さきに中絶した養育金の復活であるが、金額は増し、地域も擴げてゐる。

今後は組下全部にわたつて、養育に困難する者へは、出生のとき壹分、その翌月から南簾一片づつ六ヶ月、あはせて一兩づつ合力するから、よく徹底させるやうに、といふのがこの文書の通達内容である。（當時の一兩は銀で六〇匁、米一石が銀で五〇匁から六〇匁臺が普通であつた。）

しかも、先に居掛り二ヶ村で思ふやうな効果のあがらなかつたのに顧みてであらう、次のやうなこまかい注意を與へてゐる。

貧困な者の妊婦があつたなら、前以て申し含めておいて村役人から申越すやうに。兩鄰とか親戚とかから知らせたならば、内密に遣はすから、

本人私宅へ罷越候儀にも不_レ及、一禮申にも不_レ及、勿論

金子請取印形等請候儀にも無_レ之候間、無_ニ心置_一實意ノ取計有_レ之候様致度存候。

形式を重んじた封建時代においては、めづらしく心理的な、きめのこまかい配慮であるといつてよささうである。

この民生事業は、藩とは關係がなく、組の自治的な仕事で、直接には大庄屋である自己の負擔するところであつたから、「無_ニ際限_一儀者難_ニ申極_一」、この年から三ヶ年試みて、後のことはその時になつて相談する旨、記してゐる。

五

白河藩において墮胎や生兒壓殺を禁ずるのは、もとより定信の襲封ごろをもつてはじまつたのではない。

常松のこの「覺」をみても、禁令はたびたび下り、領内の男女に爪印を押させて周知させたことさへあつたが、それは、お觸れであり、教誡であるにとどまつて、裏づけのある方策を伴つてゐたわけではなかつた。

さうして、これは、領主の威嚴と道德的な教訓とで匡正されるやうな、なまやさしい問題ではなかつたのである。

第一、墮胎と間引きとは、ひとり白河藩ばかりではなく、日本全國の津津浦浦に行はれてゐた。地方的な陋習でもな

ければ、突發的な事件でもなかつた。本多利明は、「間引と荒し作りは箱根峠より東諸國の風俗なり。上方・中國・西國は密々にて間引子もするといへども東諸國の様にてはなく、(西域物語)」といつてゐるが、間引を東國の風俗と斷ずるのは、果斷に失しよう。

江戸幕府の創立されたころ千八百萬であつた日本の人口は、元祿享保のころに二千八百萬に達して、そのまま停滯してしまつた。十八世紀から十九世紀にかけての一世紀半のあひだ、日本の人口はほとんど増してゐないのである。統計を用ゐることを知らなかつた當時の爲政者や學者たちは、部分を知つても全國の數字を知らなかつたから、全國的規模においてこのことを論じてはゐないが、江戸時代の中期以後なほ人口を吸収しえたのは、都市は別として、津輕や南部や五嶋のやうな邊陲の小地域にすぎなかつた。

わたくしは、この人口停滯の現象を、食糧に對する人口の飽和と解釋する。日本を通じて、當時の農業技術をもつてする開墾と生産との限界に達して、これ以上の人口は養ひ得なくなつたのである。人爲的な家族數の制限、村村の人口滞留は、かうした人口飽和の結果であつて、原因ではなかつた。いはば生物學的な自然のなりゆきともいふべきもので、日本民族の歴史がはじめて當面した重大な難局で

あつた。そして、これは、江戸幕府がとつた鎖國政策の結果であり、幕府政治を崩壊にみちびいた最大の潜在的な壓力であつたと考へる。人口の増加を維持してゆけないやうな政策を墨守する政治、自分の生んだ子を養ひえないやうな經濟機構が、永續しようはずはないからである。

古者丈夫不_レ耕、草木之實足_レ食也。婦人不_レ織、禽獸之皮足_レ衣也。不_レ事_レ力而養足、人民少而財有_レ餘。故民不_レ爭。是以厚賞不_レ行、重罰不_レ用、而民自治。今人有_二五子_一、不_レ爲_レ多。子又有_二五子_一、大父未_レ死、而有_二二十五孫_一。是以人民衆而貨財寡、事_二力勞_一而供養薄。故民爭。雖_二倍_一賞累_二罰_一、而不_レ免_二於亂_一。

とは韓非子(五蠹篇)の言葉である。人口と財貨とが相關關係にあることは古への政論家がすでに説いてゐる。江戸時代の朱子學の徒は韓非子はあまり讀まなかつたであらう。しかし、當時の政治家や學者が、この人爲的な人口制限の「習俗」を指して、その原因を農民の愚昧に歸してゐる者の多いのをみるごとに、わたくしは人間性に對する侮辱を感じずにはをれない。儒教の觀念的な治者と被治者との論理からは、社會病理學は生まれようはなかつたにしても、愚昧であつたのは、果して農民であつたらうか。正確な社會の診斷をつけえなかつた治者や學者の方ではなかつたであ

らうか。

實態を直視する農政學者たちのうちには、さすがに、演繹的な儒教倫理に煩はされない人人があつた。そのひとりである佐藤信淵は、

昔、予、故アリテ一國侯ノ大夫ニ陪從シ、其國ニ至リテ
滯留セシコト有り。……一日、予、城下ニ遊ビ、老農ノ
家ニ憩ヒテ此國ノ雜談ヲ聞キシニ、此城下ニテ孕婦墮胎
シテ兒ヲ殺スコト年ニ一萬ニ餘ルト云ヘリ。頗ル富盛ノ
聞エアル國スラスノ如シ、況ヤ貧國ヲヤ。

と實態を述べながら、その原因を求めては、

然レドモ貧土ノ民ハ食物衣類ノ足ラザルニ困ミ、己ガ産
兒ヲ養ハザル者有リ。……人誰カ己レガ子ヲ愛セザル者
アラシヤ、然レドモ貧ノ甚シキニ至テハ往々己レガ子ヲ
殺ス者アリ、可レ不レ懲哉、可レ不レ救哉。(經濟要録)

と説いてゐる。彼にも全人口の飽和停滯といふ社會病理學的な觀點はなかつた。ある地域と、貧窮といふ個人的な視角からだけ見られてゐる。しかし、人口問題が生活資材の問題、主としては食糧問題であつて、賢愚や愛情の多寡によつて起るのではない、といふ根本原則には達してゐる。

江戸時代後半の人口の停滯は、經濟の問題であつて、單

なる道德の問題ではなかつた。お觸書きと爪印とで方がつくならば、衣食足りテ禮節ヲ知ルといふ儒教の格言は生まれなかつたはずである。

情況の重大さに氣づきながら、藩政府が爲すところを知らなかつた間に、見るに見かねて、道義的な立場から救済に従事する人が各地にあらはれた。それはもとより、うづまく濁流に涓涓たる清水を流しこんだやうなものであつたであらう。本を清めずして濁に抗うても、救ひうるところは九牛の一毛にすぎないとも言ひ得よう。それだからといつて、手を拱いて百年河清を待つが賢いといふことにはならない。力の及ぶかぎりには救はうといふ努力は、人間への愛情のあらはれである。白河藩の地方にも、常松のほかにも幾人かの、かうした努力が記録されてゐる。

郷士内藤平左衛門は、平左衛門盛昌から平左衛門孝昌まで、三代にわたつて、見聞きするごとに金子一兩づつ與へて養育させ、寶曆元年から寛政二年まで、約四十年のあひだに、救ふところ百人に及んだことが、白河藩の儒臣廣瀬典の「白河風土記」(卷十二)にも、伴蒿溪の「近世畸人傳」(卷二)にも見えてゐるとき、その一例である。

松平定信がその藩領で行つた人口対策は、廣瀬典の「羽林源公傳」、田内親輔の「御行狀記料」などには、次のやうに傳へてゐる。

第一は褒賞で、襲封の翌年から、殺兒の陋習に混ぜず貧窮ながらも子どもを育てて五人以上にいたる者に、賞として毎年米一俵づつ賜はつた。

これは定信みづからも宇下人言に記してゐるところであるが、毎年米一俵といふ具體的な數字を傳へてゐる。

第二には、僧侶に命じてしばしば領内を巡教して、反覆して、殺兒の罪惡なることをさとさしめ、民間に親しみやすい歌を作つて、印刷配布して諷誦させ、また地獄の繪を各戸に配布して文字を知る者に説明させた、など啓發的な文書宣傳の方法。

これは、宇下人言にイチメを利用したと記してゐるのと相補ふもので、地方にはその印刷物を襲藏してゐる人もあるさうである。

第三は、定信が中央の政柄を握つてゐた寛政二年に、その領内に始めた子育金こいくきんの制度で、初産をのぞいて、二人目から、七夜すぎに金二分、一年目に二分、あはせて一兩づ

つ給與する制度。

このことは宇下人言には書いてはないが、常松や内藤が大庄屋として個人で行つてゐた事業を、藩が踏襲したものであることは明らかである。

この子育金の制度は江戸にも名高かつたとみえて、平戸の城主である松浦靜山の隨筆「甲子夜話」(卷四)にも記されてゐる。「甲子夜話」には、一口に金一圓二方、すなはち一兩二分づつ與へたと記してあるが、この金額の差は、傳へが不正確なのか、後に増額したのか、明らかではない。

甲子夜話などが、妊婦を届出でさせ、醫者、産婆を遣はして改め、出産の時も同じく遣はして助産せしめ、多く産所において行はるる生兒壓殺を禁ずる効果をあげたよしを傳へてゐるのも、常松などの先例がうけつがれたことを示すものである。

さうして、常松が組の事業として、天明四年(一八一四)から三ヶ年試みた養育金の制度が、さらに三ヶ年つづいて、この寛政二年(一七九〇)からの藩の子育金の創設に繼承されてゐるものと推定して、おそらくは誤がないであらう。常松次郎右衛門は、これよりさき大庄屋役、兩村庄屋役も郷土も嗣子に譲つて、三郡村々役人目付役だけをつとめてゐたが。

藩の子育金は、はじめ五ヶ年試みる豫定であつたのを、八年目の寛政九年には倍額にひきあげて、あはせて二兩とした。白河風土記（卷九）によると、杵衝村の村長安藤孫右衛門のやうに、藩の費用をまたずに、自力で協力する者さへあつて、相當の年月にわたつて、効果をあげたやうである。

定信が薨じてのち、すでに白河から桑名に轉封になつてゐる世嗣定永の代に、江戸の松平家を訪れて白米五升を獻じた農民があつた。これは舊藩の百姓が、成人してのちに自分は藩の子育金によつて育てられたものであることを知つて、五升の米を蓄へて、自ら背負つて來たものである、といふ涙ぐましい話が、澁澤榮一氏の編んだ「樂翁公傳」（第十三章）に記されてゐる。據るところを示してないが、松平家が語り傳へて來た話柄であらう。

七

第四は、宇下人言に「この國女少なければ越後よりよびよせて百姓にあたふ」と記されてゐる結婚政策である。

羽林源公傳には、

越後ハ人多クシテ婦人迄モ能ク業ヲ勵、且、子ヲ害スルノ風モナク、白川在ニハ婦人少ク、娶ルニハ金ヲ出サザ

レバ年壯成者モ妻ヲモタズ、田地ヲ受ケ多ク作ルコト能ハズ、自ラ土地モ餘リ、荒廢モ年ヲ逐多キ故、越後ヨリ女ヲヨビ嫁セシメ給フ。

とある。

この政策を理解するためには、白河藩の領地の分布を知らなければならぬ。白河藩は東北の關門として古く白河の關がおかれた地で、北の南部、仙臺、會津などの大藩になへて、代代幕府の親藩を補したが、その領地は、城下を中心とした一圓領地となつてゐるのではなく、數ヶ村づつ飛び飛びに廣い地域にわたつて分散してゐた。江戸時代にはもう白河の關守は置かれはしなかつたが、この地方は、いはば一つのクッション地帯として、隣あつた部落がそれぞれ領主が異るといふやうな組織にされてあつたのである。——十年ほどまへ、桑名の古本屋から、この白河城下附近の村村を領主別に書きわけた地圖を手に入れたことがあつたが、それも今は手許にはない。

明治政府が江戸幕府から引ついた、各大名の詳細な領地目録は、東京大學に置いて、關東大震災に灰にしてしまつた。その領地目録をかつて喜田貞吉博士が書抜いておかれたものについて、當時の白河藩の領地と石高とを調べてみると、次のやうな數字になる。

白川、岩瀬、石川、伊達、信夫など、奥羽の南、いまの岩代、磐城の兩國で百七ヶ村、八萬二千石餘。

岩船、蒲原、三島、刈羽、魚沼の五郡にわたつて、越後において二百二十一ヶ村、八萬二千石餘。

すなはち、白河藩の知行十一萬石、新田込高を加へて十六萬四千石の領地は、會津を中にはさんで、奥羽と越後とに八萬二千石づつとなつてゐて、村の數においては、越後の方が多かつたのである。

寛政重修諸家譜に明らかなとほり、この松平氏は、桑名から越後の高田に移り、寛保元年（二五）定信の養祖父定賢の代に、白川城に移されたのであつて、奥羽よりも越後の方が數代にわたる舊領であつた。

越後から白川へ女を「よびよせる」といふのは、藩の領地が双方にわかれてゐるといふ地域差を巧に用ゐた施策であつたのである。

羽林源公傳に、「越後ハ人多クシテ婦人迄モ能ク業ヲ勵、且、子ヲ害スルノ風モナク」と記してゐるのは、簡にして要をえてゐる。しかしこれを論理的に配列替へをするならば子を害する風がなかつたから人が多くなり、人が多いから婦人までも勤勉たらざるをえなかつた、といふことになら

う。

越後地方に子を害する風習の起らなかつたのは、信仰の力であつた。裏日本の布教に成功して根強い地歩を占めた眞宗教團は、この越後の平野をも積極的な信仰に染めあげてゐた。佛教の根柢的な教義の一つである殺生戒は、人口の飽和といふ全國的な現象のなかに、なほ、人爲的な産兒の調節を拒みつづける地域を形作つてゐたのである。

だが、越後だけが人口の飽和に洩れてゐたわけではなかつた。ほとんどが米の單作地帯であるこの地方は、開きうるところははやく開かれて、開墾する餘地は夙になくなつてゐたはずである。濕田に、田下駄を穿き、舟にのつて田植ををするといふ風景は、さうした沼澤までも残りなく開發されたことを意味してゐるからである。

過剰の人口はいきほひ勤勞の氣風を養つた。しかし、いかに過勞に堪へるとしても、限られた生産面積と生産技術とを以て、年年に増してゆく人口を支へきれようはずはない。ましてこの地方は、シベリアから吹きつける北風が東を限る脊梁山脈にあたつて雪を降らし、高田は、日本第一の積雪都市として名を知られてゐる土地である。そして、二毛作はおろか、半年近くは居食ひを餘儀なくされる寒國でもある。

諺にも「頼まれれば越後から米搗きにも来る」といふのは、かうした地理的歴史的環境から生まれた。二足四足をたべないといふやうな殺生戒が、風習ともいへるほどにきびしく行はれてゐたこの地方では、人間そのものが人足となつて他郷に餌をあさるほかはなかつた。明治以後になつても、關東東北に冬場のはたらきに來る酒杜氏の多くは越後からの出稼ぎ人であつたし、江戸時代末からの北海道のにしん漁の、季節的な出稼ぎにも、越後から數多く渡つてゐる。

だが、かうした筋肉労働は主として男の領分であつた。この時代に女子が、郷里をはなれて、他郷で働くことのできる職業の種類が、さう多からうはずはない。年ごろの娘が、わづかの金銭と引かへに、郷里をはなれてゆくのは、年中行事にさへ數へられさうな現象になつて、親のため家のためにといふ悲劇は、どの村村にも繰かへされてゐたのである。生をこの世に享ける機會は奪はれなかつたけれども、社會的に正常な人生のコースを踏みうる見込みの極めて乏しい娘たちが、越後にはことに多く存在してゐたわけである。

八

江戸時代の中ごろからは、日本の人口が、食糧に對して飽和状態となつた。これ以上の人口をかかへきれなくなつて人爲的な人口制限が行はれたのであるが、全國的に見てさういふ現象が起つてゐるからといつて、一つ一つのどの村も、人がふえて、ひしめきあつてゐるといふわけではなかつた。越後のやうに、過剰な人口を他國に輸出してゐる地方もあれば、戸口の減少に悩む村村もあつた。

總人口がふえないのだから、都市が人口を吸収しつづけてゐるだけ、人口の減つてゆく村があつたはずである。この時代に江戸が、一時、世界第一の人口を擁してゐたといふ説がある。わたくしは、この説の論の立て方が支持できるかどうかを疑つてゐるが、この新興都市のやうな急激な人口の膨脹は、ほとんどが、農民の離村轉入によつてもたらされたものであつた。

天明六年(一八二六)に全國の農民の人口を調べたときには、そのまへ安永九年(一八〇〇)に比べた時よりも、總數において百四十萬人減つてゐる。日本の總人口が二千八百萬ほどと推定される當時にあつて、ほとんど唯一の生産業ともいふべき農業に従事する家の人口が僅か六年のあひだに、總

人口の五%も減つてゐる、といふ數字を、政治をあづかる者は、もちろん見すぐすわけにはゆかなかつた。

この減じたる人みな死うせしにはあらず。只、帳外となり、又は出家山伏となり、又は無宿となり、又は江戸へ出て人別にもいらすさまよひありく徒とは成りにける。七年の間に百四十萬人の減じたるは、紀綱くづれしがかく計りのわざわひと成り侍るてふ事は、何ともおそろしいふもおろかなり。

とは、この調査の翌年に老中となつた松平定信が、宇下人言に記してゐるところである。定信が藩においても中央にあつても、人口政策に熱心であつたのは、偶然ではない。

江戸への轉入防止、無職ものの歸農、といふ人かへし政策は、農地の荒廢を防ぎ、生産人口を維持するといふ目的ももつてゐた。その政策の責任者である定信が、

在かた人別多く減じて、いま關東のちかき村々、荒地多く出來たり。やうやう村には名主ひとりのこり、その外はみな江戸へ出ぬ、といふがごとく、末にのみわしりけり。

といひ、

いま關東の在々多く窮し、或は子をころして人別減じ、

又は荒地など多くなりたれば、(宇下人言)

と述べてゐるのは、はつきりと政治家としての反省を示し

てゐる。

國の人口が飽和して村の人口が不足するといふ矛盾、農村の窮乏が人口を減少させ、人口の過少が農村をますます窮乏させてゆくといふジレンマ、農地が足らぬから戸口が減り、人口が足らぬから農地が増すどころか減つてゆく、といふ惡循環は、十八世紀の日本の業病であつた。この業病ととり組まずしては政治といふものの存在を疑つてもよかつたはずである。

常松次郎右衛門が、天明四年の文書に、人口の少いことが地方困窮の基であることを説いてゐるのは、地方行政の末端をあづかる庄屋としての、現實を直視した判斷であつた。この問題をまともにとりあげた事は、彼が有能にして熱心なる村をさであつたのを語つてゐる。彼の父滿貫は延享三年(一七六六)に、人口離散によつて荒廢した仁井田部落を復舊した經歷を有し、それ以來、常松家が居村とともに仁井田の庄屋をも兼ねてゐたのである。

白河藩の地方では、人爲的な人口制限の結果として、女子の數は男子の數よりも少なくなつてゐた。農村、農家の勞働力を維持したいといふねがひは、窮乏の際にはかうした型の人口比率の不均衡をひき起すのが普通である。

その、乳児における男女比率の不均衡は、當然適齡期における不均衡となつて現れる。結婚難は、男女の比率についてだけいても、男子の側にあつたはずである。「白川在ニハ婦人少ク、……年壯成者モ妻ヲモタズ」といふ傳記作者の記述のあらはれる所以である。

一つの藩の領地がはなれた二つの地域にわかれて存在し、Aの地域は人口過剰に悩んで出稼ぎと人身賣買とで知られ、Bの地域は人口過少による農地荒廢と結婚難とにあへいでゐる。Aの地域の女子をBの地域に轉入すれば、どちらの社會問題の解決にも役立つであらう。適齡期の女を越後よりよびよせて白河地方の百姓にとつがせるといふのは、たしかに、奇案妙策であつた。

この政策は、白河藩が行つたものであり、藩主みづから、「この國女少なければ越後よりよびよせて百姓にあたふ」と記し、傳記の筆者が「越後より女をよびて嫁せしめ給ふ」と書いてゐるやうに、これは、英邁なる壯年の藩主の、實施した政策であることはたしかである。

だが、このやうな政策を思ひついたのは、藩主みづからであつたらうか。あるいは、側近の藩政擔當者であつたらうか。また、その實施の情況はどうであつたらうか。

わたくしは、ここに、第二の根本資料を利用することができる。

九

常松次郎右衛門の第二の記録である「越後縁女引取覺」は、表紙に、寛政四年（一七九二）五月に越後縁女の引取を仰せつけられた折、從來の方法と今後の方針とを上申した控、であるむねを記してある。この控は、やや詳しくこの結婚政策の實況を傳へてゐる。

それによれば、越後女の引取は、大庄屋をして行はしめたもので、寛政元年の春から始まつてゐる。

白河藩の越後の役所から越後の大肝煎（すなはち大庄屋）等へ申し渡すとともに、奥州の大庄屋から毎回代人二人づつを越後へ遣はして、越後の大肝煎や村役人に依頼して、人元（口入屋、周旋業者）を役使して婦女を募つて來て、奥州に到着すれば大庄屋が立會つて、一人、二人づつ引取つて世話をする、といふやり方であつた。

常松が引取つたのは、寛政元年春に十四人、その年の秋に十四人であつたが、翌年には、本人からの依頼で別に四人引取つた。そのうち二人は、先年引取つた者の老母と妹とであつた。

容易に想像されるとほり、これらの、

女共一衣之着類モ無之者^{ムシ}□□、先方ニ而衣類帶に至迄買調相渡、或は小物入用之木綿代、道中引取入用、女共小遣等迄都合仕候。

といふありさまで、人元への支拂金と合はせて、到着までの費用が七拾五兩かかり、老母一人を除いて、縁女三十一人に平均して、一人あて貳兩拾匁見當となつてゐる。

これら引取つた娘は、大庄屋が自己の費用をもつて世話し、仕事を教へ、折を見て結婚せしめたが、結婚してから、遠國へ來て知己もないので自然と大庄屋を親元のやうに慕つて出入し、娼殿までいつかさうした習慣となつた、と記してある。

近世までの村落のもつてゐた大家族的な性格は、ここに記されてゐるやうな形で形成され助長されることもありえたので、封建意識といふものが、上からの強制によつて馴致されたとのみは言ひえないことを考へさせるものがある。

しかも、親元である大庄屋の世話は、結婚までで済むといふわけにはゆかなかつた。結婚すれば、出産のおめでたもあれば離婚の不幸もできる。おめでたにはいくらかの産着の祝をすれば済むであらうが、離縁となればかなり厄介である。やむをえず再び引取つて、さらに縁づけるまでの

世話をすることになるが、何十人の嫁御に、縁付先のごたごたを一つ一つ持込まれたのでは困却するほかはなかつたであらう、「私持切之世話に者行届兼」と、悲鳴をあげてゐる。いはば親元であり、民生委員でもあり、調停委員でもある、といふわけであつた。

十

大庄屋にとつてはも一つ厄介なことがあつた。

藩の方針で、縁女たちの移住に要した費用は、結婚の相手である娼殿から返却させる仕組になつてゐた。すなはち公營の結婚媒介に、結婚資金の貸付を伴つてゐたといふ形であつた。「白川在ニハ婦人少ク、娶ルニハ金ヲ出サザレバ年壯成者モ妻ヲモタズ」といふ情況にあつては、資金の貸出とその返還とを規定したこのやりかたは、現實に即したものであつたといへよう。

常松の引取つた娘たちには、先に記した費用を、「女共人柄次第ニ」一兩二分から三兩二分まで、祝金として割あてたのである。——本人たちの希望で老母と妹とを引取つたについては、「尤老母見續之爲も有之候間二兩程之積りに御座候」と記してゐるので、一部は支度金としたやうにも見えるが、これは老母のあるための特別の取はからひで

あるらしい。

この祝金は、しかしながら、「何分遠國者ヲ貫請申儀故、大方困窮者ニ相限り」これを一度に出すことができない。右の縁女たちは、常松が「相試の爲故、私入用に而引取、追々利なし延金に縁付」けたにも拘らず、三年を経たこの年まで返済のすまぬ者もあるのが實情であつた。

それで、常松は、今後の「祝金之儀者、御延金に被仰付被下置度」、しかも藩から直接に貸付、取立をされては困難な事情の者もあるから、費用の全部を自分が藩から借りたこととして、それぞれの組の大庄屋や組外庄屋と相談して、駕殿が祝金に困難せぬやうな方策を講じたいと言つてゐる。

農民と藩とのあひだにたつて、被治者と治者との接觸點となつてゐた庄屋、大庄屋の地位は特殊なものであつたが、ここでは、おなじく土着の民として農民の利益のために企劃し懇請する善良なる地方指導者の情熱をみる事ができる。さうして、常松が、ここに、自分の輩下に屬してはゐない、對等の組の大庄屋や、組に入つてゐない庄屋への指導的な發言を、藩に上申してゐるのが、注意される。

常松は、この控の後の方に、越後へ人をやつても年柄に

よつて應募の人数に變化はあるが、駕側の希望としては、自己の負擔すべき祝金の多少よりも相手の人柄次第であるから、なるべく百姓風の女がよく、又、駕側の希望と縁女とが一致せぬこともあるから、大庄屋がそれぞれ世話してゐる中で繰あはせて、大庄屋相持の世話をする事にするならば、毎年越後の女を引取つても、手餘りになることはあるまい、と述べてゐる。

かういふ記録に、近世の暗さが感ぜられることは、いふまでもない。しかし、かうした處置に、人格が無視されてゐたことを感ずるといふならば、おそらくは言ひすぎであらう。人格の尊重、人格權の確立、といふことそのことが人間が歴史のうへに一步一步と刻みつけて來た努力の遺産である。二十一世紀の人類は二十世紀の今日の人權の低さを嗤ひうるであらう。二十世紀のわれわれが十九世紀の人格尊重の程度をさげすんだところで、五十歩百歩ではないであらうか。

東北地方には、貧困のゆゑに結婚の相手を求め得ない青年がある。越後には、貧困のゆゑに正常な結婚生活をあきらめなければならぬ娘たちがゐる。村の指導者が、自己の責任において藩の公金を借り出して、それらの青年男女の、人間らしい生活への仲だちをしようとしてゐる。

日本のやうに部落内婚が普通であつて、通婚圏の狭い社會にあつては、「遠國者」を貰ひうけるのは「困窮者」に限られてゐた。しかし、ここには本人どうしの合意による結婚が行はれてゐる。親のきめた縁組だの、見ず知らずの相手だのといふ、いはゆる封建的な、家のために個人が犠牲となつてゐるすがたはないのである。

十一

常松は、同格のほかの組の大庄屋や組外庄屋に對して、主導的な地位にあつたばかりではなく、實はこの結婚政策の立案者でもあり、實施者でもあつたやうに思はれる。

公にされてゐる藩の記録にも、定信の著作にも、そのやうなことを仄かしてゐる點は全くない。傳記者は、英俊なる藩公の治績として、この政策をひたすらほめたたへてゐるだけである。

それをさげすまうとは思はないが、そのやうな記録が、この政策が藩公や藩士など、治者の側で立案されたといふ證據にはならぬことは指摘しておいた方がよいであらう。幕府と藩とによる封建といふものは、非常體制である軍政が繼續したものである。軍事行動第一主義の戒嚴體制が

長くつづいて、平常化してしまつたものであることを知れば、武士ならざる庶民が、政治に口を挿むことができなかった理由は、はつきりするであらう。そのやうに政治が階級の特權と化した世界にあつては、藩民の企劃や立案がとりあげられたときにも、それを立案者の名において記録しなかつたところで、誰もあやしむ者はゐなかつたのに不思議はない。常松は郷士にされてはゐたが、これは士分の待遇を與へられただけのことで、武士ではない。

この二つの記録を詳しく見てゆくと、越後へ行つたのは常松の代理者であり、常松の費用をもつてしてをり、到着した縁女たちの引取と祝金振當てには他の大庄屋も立會つたが、彼等が「壹貳人宛配合」するのに、常松は二回とも十四人づつも引取り、今後も「私方ニ而割合之外ニモ引請可申候」と述べてゐる。

これからの祝金を藩から「私拜借仕」つて大庄屋たちと相談すると言つてゐることは、さきに記した。

この「覺」が、越後縁女の引取を「仰せつけられた」折に、從來の方法と今後の方針とを「上申」した控、であると副題してゐるにも拘らず、この縁女引取の推進力は彼一人にあつて、その發案者も實施者も彼みづからであつたことを推測させるものがある。

はたして、小笠原勝修著の「續國史略」の後編二には、次のやうな記載がある。

定信、其封内磐瀬郡鏡沼村ノ常松次郎ヲ賞シ、祿五十斛ヲ與フ。次郎、家世々村長、次郎ニ至ツテ施ヲ好ミ賑恤ス。仁井田村民離散シ、殆ンド盡ク。寶曆中命ジテ之ヲ兼理セシム。幾クモ無ク、戸口舊ニ復ス。乃チ祿十五斛ヲ與フ。州俗一二兒有レバ其餘ヲ舉ゲズ。官屢々禁ズレドモ止マズ。次郎謂フ、越後ハ州ト同管ニシテ人多シ。乞丐ト雖モ能ク子ヲ舉グ。彼ノ女ヲ迎テ州人ニ嫁セバ則チ惡弊自ラ除カント。遂ニ白川ニ請ヒ、多ク越後ノ女子ヲ招キ、賞ヲ捐テ之ヲ鞠フ。而シテ人ニ醺ス後、果シテ皆産子ヲ舉グ。又之ヲ賞ス。命ジテ郡中ヲ監セシム。

(寛政二年十二月の條。原、漢文體)

十二

生兒の壓殺は生活の困難に根ざしてゐる。越後からつれて來られた娘たちは、貧困な者にとついだ。はたらき手が一人ふえたにしても、それぞれの家の生計をどれほど緩和することができたろうか。子育金や賞米の制度が、子女の養育難を和らげ得る限度も、推測するに難くはないであらう。

しかし、生きた信仰は、現實の苦難に直面しても、たちろぐことはなかつた。

引越女共ニ出生有レ之節ハ、自然と越國の風儀押移リ、乍レ恐養育方被ニ仰渡ニ無レ之候ても右女共の義は相愼可レ申、

と、常松がこの上申控に述べてゐるのは、この政策の成功を語つて、餘すところがない。恐レナガラ養育方仰渡サレコレ無ク候テモ、といふ一句、爲政者の迂愚を指摘して干鈞の重みがある。

公營結婚仲介をはじめてわづか四年目に、その實施擔當者である常松は、信仰の凱歌を裏書きした。「引越女共」がさうであるからには、同じ風儀は子から孫へと傳つて、漸次に廣く及んでゆくべきは明らかであつて、信仰心の傳承が、幼時の家庭の、ことに母の感化による所が多いといふ説が正しいならば、この人口移住政策は、むしろ信仰移植政策とよばるべきものであり、迂遠なごとく見えて、確實な効果を期待しうる永久的な施策であつた、と言はなければなるまい。

この政策の繼續年月と「引越女」の總數とは、まだ明らかにすることができない。

越後には、

越後女は白河起す、これも殿御のおたまもの

といふ民謡があり、このときの應募者が五百人に及んだところがあるよし、中川杏果氏が報じてをる（民俗藝術、昭和三年五月號）ほか、越後側の資料についても、未だ知るころはない。

江戸末期の思想界の一異彩である山片蟠桃は、仙臺藩の財政を建て直した大阪の商人升屋の番頭で、小升とよばれた町人學者である。藩の藏元の番頭といふ、いはば財政顧問のやうな地位で、仙臺藩の財用方役人齋藤左五郎にあてて書き送つた文化六年の文書が、「一致共和對策辨」と名づけて、近世社會經濟叢書の第五卷に收められてゐる。その中に、蟠桃はかう述べてゐる。

一、百姓他領より縁組の事

此事は已に命下りて被爲行候由恐悦の事也。白川より伊達の大木戸に至迄越後の女滿々なるに、越河より奥になき事は、御國中古より他邦出入とも御制禁成故なるべし。此度入るを許して出るを止め給ふは其術を得玉ふ物也。扱又女を買得て百姓へ娶らせらるゝは、古聖人民に曠夫なき意に叶ひて、古今の良策を得させらるゝと云へし。

「白川より伊達の大木戸に至るまで、」といふのは、今の福島縣の中通り全部であるが、白川藩の領地が、この地域にわたつて散在してゐたことは、さきに指摘したとおりである。従つてこれは、奥羽における白川藩の施策を指すもので、それ以外の藩には關係はない。

蟠桃がこの文書を書いた文化六年は、常松が、「引越女」をはじめてつれて來た寛政元年から二十年のちである。この二十年のあひだに、「越後女滿々」と行人の眼に映するやうになつたのは、この施策が成功して、しかも繼續的行はれてゐたことを語つてゐる。さうして、一步越河から北の仙臺領に入ると、依然として部落内婚の世界であつて二十年前の白川藩の歎きをくりかへしてゐる。仙臺藩にこのことを告げて、通婚圈の擴大を勸告したのは、山片蟠桃みづからではなかつたであらうか。それはともかく、この人口對策が、犀利なる財政人の眼に、以て範とするに足る、と思はせるだけの良策であつたことは疑ない。

十三

白河藩の地方におけるこのやうな人口政策の効果については、羽林源公傳の筆者は、

如し是心ヲ反シ給フ故、其後ハ知ラズ、寛政年中人數ヲ

算セシトキハ、天明五年ニ比スレバ、三千五百餘人増シ、新百姓追々取立、城北飯澤ナドハ村落ヲナシ、所々ニテ高百石ノ餘モ出來タリ。

と記してゐる。御行狀記料と對照すれば、寛政年中といふのは、「御初政より十年計」で、寛政四年ごろを指し、天明五年の人口調査では、「御城下の農民十一萬千十六人」であつた。七年間に三分強の人口増加は、この時代としては、特記するに價するだけの率であつたこと、さきにあげた常松の覺の、その居村において四十年間に三十人といふのに比較しただけでも、明らかである。

しかしながら、幼少から定信に親しく仕へた田内親輔が、定信のなくなつた後に、「我先君の御行狀を書記すべき旨君より仰を蒙り……御行狀の料にもとて」書き記した「御行狀記料」が、

今ハサル業スル者ハ……昔語トイフ計リ、山深キ里迄モ絶エテ止ミヌ。

と述べてゐるのは、現實を知らない空論でなければ、主君を飾らうとしての潤筆である。子育金や結婚政策で人口の停滯を拭ひ去ることができらるゝのであるならば、十九世紀の日本の歴史はもつと別なすがたをとつてゐたはずである。——この一句は、幕府と藩といふ軍事的な非常政治體

制がながく繼續したために、治者として臨んだ士君子に社會を診斷する能力を失はせてしまつたことを示してゐる、と批評することさへできるであらう。

明らかな反證をあげる。

次の文書は、襖の下張りになつてゐるのを發見したものであるが、美濃紙に筆で書かれた自筆の草稿で、第一葉だけで、第二葉以下を失つてゐる。筆者は常松次郎右衛門の後裔で、明治十五年の福島事件に連座した政客であるから、起草年月も提出先も記されてゐないが、明治のはじめに、縣會に提案しようとして起草したものであると推定して誤なからうと思ふ。

議案

市原又次郎

近國之村里、窮乏ノ民、出生之赤子^(カシ)壓スルノ惡風、古來ヨリ往々有之、從前其領主地頭ヨリ間々教諭有之候得共、其方法懇切ナラサルカ、今日ニ至リ其風依然洗除スル^ル能ハズ、有志之者慨嘆憤勵スルモノ無ニアラズト雖モ、其一人ノ能スル所ニアラザルヲ以力止ム。今斯御維新ノ盛時ニ當リ、人倫ニ悖リ天道ニ背クハ勿論、富強之術何ヲ以テ本トセンヤ。大凡白河岩瀬安積ノ戸數不舉之兒、概シテ一村三人ニ下ル可ラズ。之ヲ三郡ニ^(以下闕ク)

左下に、「一村貳人ニテ凡三千人」といふ書入れがある。

これを見ても、この地方で生児壓殺が「昔語トイフ計リ山深キ里迄モ絶エテ止」んだのは、明治も年をかさねて後のことであることに議論の餘地はない。

鎖國のつづく限り、人口の飽和は緩むはずはなかつた。國をひらき、幕府政治がたふれても、人爲的な人口制限はなほ絶滅はしなかつた。長塚節の「土」は二十世紀に入つてから書かれてゐる。それを「昔語り」にしたのは、動力革命と、工業の振興とによつて、農村の過剰人口を都市の工場が吸収しつづけたからにほかならないのである。

十四

人爲的な人口制限は、農村において行はれたばかりではない。都市でも半ば公然と行はれてゐた。ただ、農村では生まれてからの壓殺が多かつたのにくらべて、都市では生まれぬさきの墮胎が多かつたやうで、ことに、女醫科である中條流は、墮胎醫の別稱であるかのやうに見られて、川柳子に多くの題材を提供してゐる。

定信は、この都市の墮胎や間引きの亡靈を弔ふために、寛政五年に江戸の本所の回向院に水子塚を建てさせた。この年は、自叙傳である宇下人言を書いた年であるが、何故

か宇下人言には、

のち／＼おもひあたりてよろこび侍らんは、予がはからひしうちにも、深川本所の水塚、この社倉の米穀、町々の火除地なんどは、時々思ひあたることあるべし。

といふ簡単な記述よりない。簡単な記述ではあるが、みづからその治政の功績として數へてゐるのであるから、單なる裁許や口添へ程度のものではなかつたことがわかる。

回向院は、明暦三年の江戸の大火に犠牲となつた十萬餘の人人の死骸を埋めた土地に、その幽魂を弔ふために建てられて、諸宗山無縁寺と號したのがはじまりであるから、罪なくしてこの世をはなれた幼厲を弔ふに適したところであつた。

この碑文のはじめに、墮胎死胎天殤の靈がここに一萬も埋めある旨記してゐるのは、人をして驚かしむるに足りよう。死胎天殤とは主として間引きを指してゐることは、もちろんであり、それも自分の家の墓地に埋めえないものだが、ここに埋葬されたのである。

水子塚は、江戸時代から有名で、その碑文をここに載せるまでもないのであるが、活字になつてゐるものには原文を正しく傳へてゐないものもあるから、研究室で拓つた拓本によつて全文をかがけておく。

(正面) 水子塚

(右側)

墮胎死胎夭殤之靈埋瘞於此凡一萬人寛政五年
癸丑五月建修法要薦福幽魂募以百八念珠點窠
之圖使緇素唱寶號隨乎根機十念百念或千萬念
彩填一顆以爲功德竟以圖勒石墳土曰夭亡塚永
世以胎夭亡骸瘞於此等令幽魂潤乎法澤云爾

(左側)

寛政五癸丑年五月廿八日

國豊山回向院十二世

見蓮社在譽巖龍建

この碑の正面、大きく水子塚と書かれた下の臺座には、
次のやうな連名が刻つてある。これは見逃されてゐること
が多いやうであるが、注意すべきものを含んでゐる。

稻葉氏先祖代々一切精靈

本相常源菴主根室貞源大姉

川島氏先祖代々一切精靈

昂應淨心有無兩縁諸精靈

村上氏先祖代々一切精靈

覺智道運信士見阿妙鏡信女

稻田氏先祖代々一切精靈

後藤氏先祖代々一切精靈

法音院樂譽妙全大姉

遠洲南島村川嶋氏俗名たま

本珠艷光大姉眞法信士

法西三九月十四日精靈

鳥羽村六月初三日精靈

於カン於イワ於ヨキ

俗名 於サン於ユワ万吉於トヨ

於千代於シナ佐七

釋惠近

水子二人忌

最後に「水子二人靈」とあるのは、この無縁塚に納めた
胎児への供養であらうし、月日を書いただけで名のない精
霊、名だけが並んでゐる連名なども、この塚の碑を建てる
にあたつての寄進が、どういふ人たちから寄せられたかを
語つてゐるものと思はれる。

定信は、當時の世俗一般にくらべて佛教に親しんだとい
ふやうな人ではなかつた。彼の教養は、父を承けた歌文の
道であり、彼の宗教感情は、むしろ素朴な古代人的なもの
であつた。水子塚を回向院に建てさせたといふのはここが
幸うすき無縁の人人を弔ふ幕府公認の社會施設であつたか
らにとどまる。その彼が、この碑一つの建立を、後世の人
の「おもひあたりてよろこび待らん」と自負してゐるのは、

人爲的な人口制限についての彼の立場が、人間に對する深い愛情に根ざしてゐることを思はせる。

そしてこのことは、ひるがへして、その藩治において、特異な人口對策を採擇し、實施に協力した根柢にも通じてゐるといふことがいへるであらうと思ふ。

(昭和二十七年十一月新稿)

十五

組あがつて校正をしてゐるときに、常松家の「家譜考」の寫本を見ることができた。内容が前後するが、二、三ここに補つておく。

常松は藤原氏を稱し、義久を中興の祖とし、そこから世代を數へてゐる。義久は岩淵村の館主となつたが、天正十七年に伊達政宗が二階堂氏を滅したとき、江持河原で戦死した。その子の孫十郎は、譜代の僕が隣の仁井田にゐるのをたよつてそこで生長した。

常松と鏡沼村との關係は、いまの國道が開かれたときに始まる。室町時代までの奥羽街道は、このあたりではもつと西を通つてゐた。寛永九年(一六三二)に、常松の三代目である元重が、新道開鑿と屋鋪割を、當時の白川城主丹羽長重から命ぜられて成功し、そこに定住した。すなはち常松は

この村の草分けの功勞者であつて、村ができるとともに、その子重由が庄屋役を申付けられたのである。

七代滿貫にいたつて、延享三年、仁井田村が亡所になつたので、先の庄屋役が免ぜられて、常松に兼帶を申付けられた。續國史略が、寶曆中、元貫のこととしてゐるのは訂さるべきであらう。常松の家譜考には

仁井田村ハ元鏡沼村端郷タリ。明曆三丁酉年鏡沼本村ヨリ六戸、外庄屋役一戸、稻村ヨリ五戸、都合十二戸入百姓分村トナル。然ルニ耕所瘠地故作德薄、漸次困難ニ陥リ終ニ延享三丙寅年、潰退轉亡村相成タルニ付、同年七月十八日右村庄屋役兼帶拜命、因茲一層丹誠ヲ施シ漸々相復セシ等盡力奇德之至ニ付、寛延二己巳年四月廿六日賞與アリ

といふ記載がある。この仁井田は、もと出作り地で、そこに分村を作つたが、寒冷地で收穫が少く、村民が逃散してしまつたことがわかる。仁井田といふ地名は、この地方に散見するが、新田の意味であらう。常松の祖が戦死したときその子がかくまはれたのも、この、岩淵と鏡沼の間にある仁井田であるが、そのころには、おそらく出作り小屋があつたにすぎぬであらう。

滿貫の時に、鏡沼・仁井田の庄屋役のほかに、三人扶持

を賜はり、大庄屋次席にまでなつた。

次郎右衛門元貫はその子である。彼が藩主の知遇をえて地方行政のために活躍したあとは、その履歴が詳しく語つてゐる。

八代 八郎右衛門、後次郎右衛門、晩號義作、又義得。

元貫

松平越中守殿御代寶曆五乙亥年家督鏡沼村庄屋役相續

寶曆六丙子年十二月十一日親與左衛門席ニ被申付、父子御

目見得ス

同十一辛巳年十月與左衛門通被申付、仁井田村兼帶役三人

扶持共相續

同十三癸未年五月高十五石賜、兩村大庄屋役被申付

同年十二月廿九日高五石加増

明和元甲申年十一月四日御紋付社祢ヲ賜

同二乙酉年十二月廿六日大庄屋一統三人扶持ツツ賜

同三丙戌年六月三日組下加村被申付、十ヶ村支配ニ相成

同四丁亥年七月十一日御目見席内藤常三郎次席ニ被申付、

三郡中六番目ナリ

同年十一月廿九日御内用向爲出精高五十石加増

同六己丑年十二月廿三日御内用向爲出精高貳拾石加増

安永元壬辰年十二月廿四日大庄屋役兼兩村庄屋役兼帶俸金

吾相續被申付、賜高之内七十五石居置御内用方被申付

同三甲午年二月朔日御紋付小袖ヲ賜

同五丙申年二月二日高廿石加増

同七戊戌年十月仁惠ヲ施候段爲稱美郷士格ニ被申付、高九

十五石ナリ

天明元辛丑年十月廿六日高百石郷士被申付

同三癸卯年十月高五十石加増

同四甲辰年十一月朔日白川岩瀬石川三郡村々役人目付役被

申付、御用往返持鎗免許

同八戊申年八月隱居願差出候處與一右衛門へ高百石郷士相

續被申付、目付役ハ御差留、高五十石居賜

隱居願内意屢相歎候處寛政五癸丑年二月廿六日御目錄ヲ

賜、隱居ス

勤役三十九年、七十歳ナリ

文化元甲子年七月八日卒、年八十一

法名 松翫院相譽仁性義得居士、葬地西光寺

このあとに、①天明三年の凶作のとき組下十ヶ村の極貧の者へ合力したことに對して白川役所から賜つた感札の寫、②伊藤徳之の記常松治郎右衛門事といふ文章、③寛政十二年の秋少將君(定信)が入湯の歸りに常松の宅へ立寄つたときに献上した出土銅器の記(この銅馨は集古十種に載せてある)。④寺に納めた厨子の圖。⑤支配してゐる兩村の民が上納金を廿一ヶ年賦にしてみらつた禮に、進ん

で協力して常松の新田に井を堀り、溜池をつくつた。彼の死後、文化十年十月に、その由來を白川藩の廣瀬典が記して碑を建てた、その奇特池の碑の文、をのせてゐる。

さうして、人口對策については、③と④との間に、貼紙して、

越國女ヲ買入貧民ニ嫁シタル篤實ノ件

といふ注記があるだけである。

次郎右衛門の孫に安之といふ人があり、分家して鏡沼と仁井田の二ヶ村の庄屋役と三人扶持を相續し、加へて、高十五石、大庄屋、九ヶ村支配となつた。そして、享和二年に廿歳で、君命によつて江戸昌平坂御學問所へ出學し、歸村して晩年に菊畦と號した。(塩谷宕陰に贈常松菊畦叙といふ文があり、宕陰存稿卷三に收めてある)その菊畦の孫の元長がこの「家譜考」を編んだので、編纂は明治に入つてからであらうと推定される。

家譜考が、越國から縁女をよびよせた件を書き加へる意圖をもつてゐながら、これを果たさなかつたのは、何故であるかわからない。わたくしが利用した二つの資料は、當時常松の本家に存してゐたはずである。おそらくは、四代を隔てた明治のはじめになつては、昔語りに聞くばかりで、さうした村の歴史は村人にも耳遠くなつて、具體的な事柄

は忘れられてゐたであらうから、彼も、たまたま資料の見當らぬままに、詳細を知ることができなかつたのではあるまいか。

この家譜考をたどつて、草わけ百姓が庄屋となり、大庄屋となり、藩命によつてその子を東都の官學に遊學せしめ、やがて明治の維新後の變動に没落してゆくすがたを見れば、それ自身村の歴史であるともいへるが、それは今の問題ではない。わたくしは、この特異な人口對策の推進者と、その家系と經歷とを明らかにすることをもつて、この補筆の筆を擱くことに満足しよう。

(昭和二十八年一月)